韓国研修報告

愛知学院大学　薬学部２年　大石尚史

１．概要

2023 年 8 月 7日～8月 10日の4日間の韓国研修に参加した。研修では、漢陽大学病院、韓方市場、ソウル医学博物館、GC biopharma などを訪問した。また、漢陽大学薬学部との交流会が行われ、韓国の薬学生と交流した。

２．所感・感想

＜漢陽大学病院＞

漢陽大学病院は、リウマチ疾患やALS(筋萎縮性側索硬化症)などを専門とした国際病院で、最先端の医療を提供している。今回、私たちは、地下1階にある治験薬を管理する部屋と病院の薬剤部を見学させていただいた。治験薬は、保存条件に関してとても厳しい薬が多いため、保管場所の温度などを厳密に管理していた。薬剤部では、薬剤のミキシングや調剤の様子を見ることができた。大学病院での業務は、日本と韓国で大きな違いはないように感じた。しかし、日本と韓国では、薬剤師の数に差があり、漢陽大学病院は、入院患者 600 人に対して薬剤師計 35 人と薬剤師の人数が少ないように感じた。これは、薬学部の人数が少ないことや薬剤師の社会的な地位の違いによるものと思われる。

＜日本と韓国の薬学部の違い＞

漢陽大学病院に実習に来ている薬学生から韓国の薬学部について教えていただいた。韓国の実務実習は6年生から始まる。日本の CBT や OSCE に該当する試験はなく、病院、薬局、企業など約 15 週間かけて基礎的な内容を習得した後、自分自身が興味を持った分野の内容について 15 週間かけて学び、内容を深めていく。例えば、病院のアドバンスト実習では、TDM、抗がん剤、服薬指導などより専門的な分野に触れることもできる。上述したように韓国では、薬剤師の社会的地位が高いため、薬学部の倍率が高く、また、1 つの薬学部の生徒数が 1 学年あたり 35 人前後のため、とても優秀な人しか薬剤師になれないのではないかと思った。

＜韓方剤市場・韓方博物館・ソウル大学医学博物館＞

ソウルの韓方剤市場ではさまざまな生薬が展示、販売されており、最寄り駅の改札口にも生薬の展示があった。日本では、漢方薬として錠剤や散剤でしか見ることができないが、この市場では、実物の生薬の植物が天日干しされていたり、生薬が量り売りされていたりしていて、とても興味深かった。韓方博物館では、漢医学に関する資料や漢医学分野で使用する道具、生薬などが展示されていた。また、鍼・灸に関する記述もあり、これまでの韓国が東洋医学中心の考え方であったことが分かった。ソウル大学医学博物館では、近代から現代にかけて韓国に導入されてきた西洋医学に関する医学史と当時使われた器具などについて学んだ。韓国の医学の発展に日本人も関わっていたことが分かった。

＜GC Biopharma＞

韓国の製薬企業「GC Biopharma」を訪問し、研究の様子などを見学させていただいた。この会社では、主にバイオ医薬品や血液製剤、ワクチンなどを製造している会社で、研究施設では、動物や細胞株から目的タンパク質を作ったり、血液から目的タンパク質と抽出したりする研究を行っている。また、タンパク質の保存条件に関する研究も行っていた。分析機器は自動化されていて、これによって精製された医薬品を工場で生産するという流れで医薬品を開発している。会社の主な商品は、血液製剤とワクチン(水疱瘡、インフルエンザ、破傷風、B 型肝炎など)で、一部の医薬品は世界に向けて販売している。また、希少疾患についての研究も行っており、ファブリー病や血友病などを研究している。

これらに加えて、製薬の工場での技術を教えるなど、製薬企業は、世界の医療にとって大きな役割を担っていることが分かった。

＜韓国の調剤薬局＞

韓国の調剤薬局は、ほとんどが個人経営の店だった。韓国で流通する医薬品

のほとんどが医療用医薬品で、OTC薬が日本に比べて少ないことが分かった。処方される薬の方が安いことが原因と考えられる。韓国では処方された薬を一包化することが一般的で、最大で半年分の薬をもらうことができると聞き、とても驚いた。また、韓国では薬袋がなく、ただ薬のみが手渡しされていて日本との違いを大きく感じた。加えて、韓国では在宅医療の制度がないことを知り、日本がいかに超高齢化社会となっているかを痛感した。

韓国の地域薬局の薬剤師から、服薬指導のあるべき姿について教えていただいた。それは 5 つの要素から成り、①ice breaking ② fact finding ③ delivery information ④ confirmation ⑤ farewell で構成される。一番大事な要素は①で、相手(患者)と打ち解けるコミュニケーションをすることが薬剤師にとって一番大事であると分かった。また、「自分の給料を決めるのは自分自身」とおっしゃっていて、自己研鑽の大切さを改めて感じた。

＜漢陽大学薬学部との交流会＞

漢陽大学薬学部にて合同シンポジウムを行った後、夕食会が開かれ、韓国の学生と多くの会話を楽しんだ。英語でしっかりとコミュニケーションをとることが初めてで最初は緊張したが、韓国の学生がとても話しやすい雰囲気を作ってくれたので、返答もうまくできてよかった。交流した学生は 6 年生で 1 学年が約 35 人なので、韓国の学生同士の仲がいいように感じた。

＜感想＞

今回の韓国研修にて日本と韓国の医療の違いがよく理解できた。また、英語でのやり取りを通じてコミュニケーションの重要性を感じた。今後の勉学や実習、5年生での実務実習に活かしていきたいと思っている。最後に、本研修に当たって、多大なるご支援をいただいた愛知学院大学薬学会や研修に携わった全ての関係者に心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。

3．添付資料

写真１.漢陽大学病院薬剤部

写真２.韓方市場

写真３.韓国の地域薬局

写真４.ソウル大学病院

写真５. GC Biopharma 社の医薬品

写真６. 漢陽大学薬学部との交流会

以上